

【心臓血管外科からのお知らせ】

外科学講座（心臓血管外科） 教授 浅井 徹



心臓血管手術のメッカとして

現在、滋賀県内のみならず全国からも多くの手術をお受けして、去年は年間200例を超える成人心臓手術（血管を含む総手術は300例以上）を行い、全国屈指の心臓病治療センターとして多くの方のご支援をいただけてきました。これまで実績をあげてきた治療の一部を、ご紹介いたします。

安定性の高い心拍動下冠動脈バイパス手術

心臓のバイパス手術は、最も力を入れてきた治療です。3年間で当院でも300例を超える手術を施行してまいりました。

当院の手術の特徴は2つあります。まずはその安定した手術手技で、重症心不全の患者さまでもほぼ100%近い手術完遂率を誇り、この点では全国、海外でも他の追随をゆるしません。次に、長く開存する動脈グラフトを超音波メスを使用して最高の状態で使っていることです。

妥協なく高い質のバイパス手術を、最も安定した新手術法で行ってきた業績は、これまで国内の雑誌、新聞だけでなく、国際的にも高い評価（2003年 San Francisco の ISMICS 学会でアワード受賞）を得てきました。

あらゆる病変に対応できる僧帽弁形成術

僧帽弁閉鎖不全に対する治療は病変の種類に関わらず再建を成功させてきました。病態の3次元構造を正確に評価し、確実な収縮期弁接合を作製する再現性の高い手術です。当院ですでに100例近くの実績をあげてきました。

いかなる大手術も低侵襲に

近年、より重症疾患に対する手術治療が増えましたが、安心して治療を受けていただけるよう Super Fast-Track Protocol（超早期回復管理）を導入しています。複雑重症手術にいたるまで、術翌日に食事摂取、離床歩行を行える早期回復です。この方法は現在本邦でどの施設と比べても早い回復を達成しております。今後さらに高いクオリティーを目指し、いかなる重症でも、これまでにない低侵襲治療で期待にお応えしてゆきます。

この他に、心房細動根治手術、難易度の高い再手術、透析下腎不全や高齢者の手術など、今後も安心してお受けいただける治療を発展させてゆくつもりです。



（ホームページ「浅井徹 Online」の URL... <http://www.shiga-med.ac.jp/toruasai/>）



リハビリテーション部からのお知らせ

リハビリテーション部 助教授 今井 晋二



平成15年4月に、これまで院内措置として置かれていた『リハビリテーション部』は、中央診療施設としてのリハビリテーション部に格上げ(省令施設化)されました。これに前後して、(1)これまでは脳外科、神経内科、整形外科に限っていた対象疾患を、胸部・腹部外科、循環器・呼吸器内科の疾患にまで拡大し、(2)これによる患者数増加に対応すべくリハビリ依頼の受け入れを、開学以来の週1回から3回に拡充、さらに(3)対象疾患の多様化で診療のクオリティーを劣化させないよう、院内のすべての病棟を対象とした全病棟リハビリ・カンファレンスを定例化しました。

実際に患者さまにリハビリを施術する中心職種は、理学・作業療法士・言語聴覚士です。私立病院では普通に10人、20人と配置しているのに対して、国立大学病院ではこれまで簡単に定員を増やせない環境にあり、ここ15年ほどは理学療法士3名の体制のままでした。しかし、先ほど挙げました省令施設化と国立大学法人化によって人員配備の拡充が可能になりました。平成14年には理学療法士1名、16年には理学療法士1名と作業療法士1名が配備され、17年度には言語聴覚士の配備が予定されており、患者さまの多様なニーズに対応することが可能になりました。

疾患とその後の障害(後遺症)と言う治療経過の観点から見ますと、急性期治療に引き続く回復期・維持期のリハビリは重要であり、回復期・維持期へのスムーズな移行なくしては家庭復帰・社会復帰は成功しません。回復期・維持期へのスムーズな移行には、急性期からの積極的なリハビリが有効であることが、某野球監督の脳卒中後リハビリでも証明済みです。

多様な疾患について、その発症の早期から有効なリハビリテーションが施術できるよう日々精進し、リハビリ技術の研鑽に邁進したいと思います。



リハビリテーション部スタッフ



位相コントラストマンモグラフィ

放射線部

ご周知の通り、日本全国の自治体で乳房X線撮影(マンモグラフィ)を用いた乳がん検診が普及してきています。これは乳がんを早期に発見し、治療することで患者さまの生命はもちろん、Quality of Life (QOL) の向上や医療経済的にも有意義であるという根拠に基づいています。滋賀県においても積極的に取り入れ、マンモグラフィを用いた検診を40歳以上の女性に受診を勧めています。

【位相イメージング】

X線は、一般的に物体を通過する際に散乱および吸収されます。X線自体は電磁波(光、ラジオの電波)と同様の性質を持っているのですが、光と異なり干渉や屈折を起こさないと考えられていました。しかし、近年、X線は物体を通過する際に、非常に小さい角度で干渉および屈折することが分かりました。その屈折、干渉のことを位相と呼びます。エネルギーが均一なX線では、その現象は良く確認できるのですが、皆さんもご存知のSPRING 8 などの大規模で特殊な電子の加速装置が必要です。実際の医療の現場で、X線診断に使われている画像の多くは、殆どがX線の吸収による吸収コントラストによるものです。位相イメージングは、従来の吸収コントラストに加え、屈折X線により作られる屈折コントラストで画像を作ります。よって位相イメージングにより撮影された画像は、今までのX線画像に比べて、非常に見やすく、診断しやすい画像を提供します。



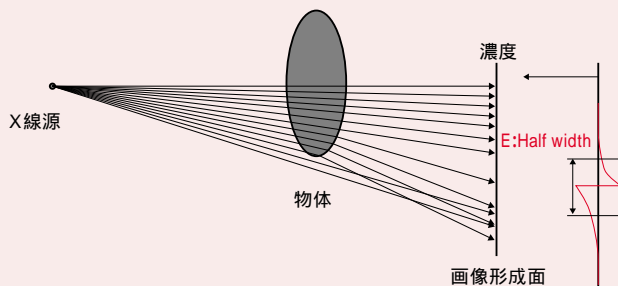
【Phase Contrast Mammography (PCM) / 位相コントラストマンモグラフィ】

屈折X線の特徴は、物体の境界に生ずるエッジ強調(効果)です。今までのマンモグラフィでは、乳腺と腫瘍が重なると腫瘍の辺縁がはっきりしなくなる場合があります。このような場合においても、位相イメージング装置で撮影すると、乳腺と腫瘍の関係がはっきりとわかります。はっきりとわかることで病気の診断がしやすくなります。また、早期乳がんの手がかりである小さな石灰化などは、従来のマンモグラフィよりも発見しやすいシステムとなっています。

当施設ではこの最新の技術、理論を基にした位相コントラストマンモグラフィ装置を臨床応用しています。この装置は、フルデジタルシステムであるため安定した画像を提供できます。また、この装置による乳房デジタル画像は、現時点で世界最高のものとして関連学会から高く評価されています。

位相コントラストとは？

X線は透過率の違う物体を通過する際、屈折します。その結果、画像上では腫瘍などの辺縁を明瞭にします。



尚、このデジタルマンモグラフィシステムは、一人でも多くの女性を乳がんから救うために、コニカミノルタ社と共同研究、開発しました。さらに、よりよい位相コントラストマンモグラフィ画像を提供するために研究を継続して実施しております。



待ち時間の調査結果について

本院では、昨年10月に患者さまに、より満足いただけるようアンケート調査を実施いたしました。

この調査は、外来患者さまに対して、待ち時間及び病院職員への満足度。入院患者さまに対して、病院職員、設備・入院環境及び人権への配慮に関する満足度を評価していただいたものです。アンケートにご協力、誠にありがとうございました。

アンケート調査の中で、特に患者さまからの関心の高い待ち時間について、ご報告いたします。

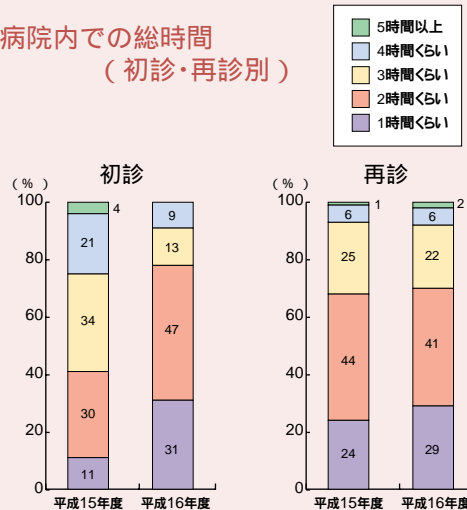
病院内での総時間は、昨年度と比較して初診・再診とも短くなっています。診療開始までの待ち時間は、昨年と比較して再診は短くなっていますが、初診については逆に長くなっています。

待ち時間をいかに少なくしていくかが今後の課題ですが、予約システムを充実させ、更に予約センターの設置等についても検討していきます。

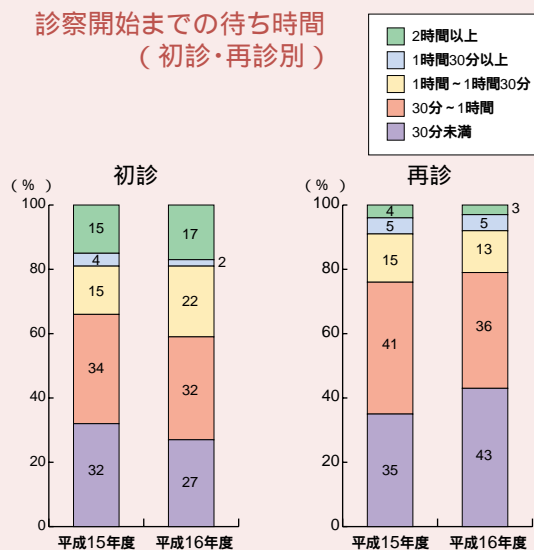
なお、患者さまからのご意見やご要望を積極的にいただけるように、1階だけではなく、2～6階の病棟にも「ご意見箱」を設置いたしましたので、ご遠慮なくお出しいただきますようお願いいたします。



病院内での総時間
(初診・再診別)



診察開始までの待ち時間
(初診・再診別)



滋賀医科大学医学部附属病院 理念

「信頼と満足を追求する全人的医療」

滋賀医大病院ニュース第6号

編集・発行：滋賀医科大学広報委員会
〒520-2192 大津市瀬田月輪町
TEL: 077(548)2012(企画調整室)
過去の滋賀医大病院ニュース(PDF版)はホームページをご覧ください。

理念を実現するための基本方針

患者さま本位の医療を実践します
信頼・安心・満足を与える病院を目指します
あたたかい心で最先端の医療を提供します
地域に密着した大学病院を目指します
世界に通用する医療人を育成します
健全な病院経営を目指します